備陽史探訪
第74号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

御調町の三吉一族

その入部をめぐって

会長　田口　義之

山に囲まれた御調町は山城の多いところである。中でも丸山、雲雀、牛の皮の三城跡は良く、遺構を残し、戦国期の典型的な山城といえる。そしてこれらの城主、上里、池上、森光の諸氏は三吉一族であったというのである。

三吉氏は『芸藩通志』等によると平安時代の「三筆」として有名な大納言藤原行成の子孫と伝え、鎌倉時代以来、三次市畠敷町の比叡尾山城に居城し、備北の一大豪族として威を振った。室町時代には、山名、大内、尼子等の大勢力と結びついて所領を広げ、十四代隆亮の代には安芸の毛利氏の勢力下に入り、当時、その所領は八万石に及んだという。

ところで、三吉氏の本拠は先述のように備北である。その三吉一族が何故、この備南、御調の地に山城を構えたのであろうか。

伝えによると、上里氏は明応二年（一四九三）五月、三次から丸門田の地に移り、丸山城を築いたという。又、運雀城主池上氏もその初代丹後守が市村に来住したのは明応年間であると言う。（『御調の文化財』）

明応年間といえば、当時、備後の守護大名であった山名氏が、政豊、俊豊の親子の間でその守護の座をめぐって争っていた時代である。

すなわち、有名な山名宗全の跡を継いだ政豊は、文明末年から播磨国に攻め入り赤松氏と戦っていたが、長享二年（一四八八）、第十代将軍となった足利義材は赤松氏に同情し、同氏を影で援助した。そのため政豊は播州坂本で大敗を喫し、無理矢理隠居させられ、その跡は義材と親しいその子俊豊が嗣いだ。ところが、明応二年、時の管領細川政元によるクーデター（明応の政変）が成功し将軍が義材から義澄にかわると、その立場は逆転する。つまり政豊は細川政元と結び、俊豊を守護の座からひきずり下ろそうと画策したのである。うしろだてを失った俊豊は同三年、京都から但馬（父政豊の本拠）に馳せ下り、父政豊と数年間にわたって合戦をくりかえすことになる。しかし、結局は政豊方が勝利したようである。明応八年（一四九九）、政豊は死去するが、その跡目は俊豊が嗣がず、その弟致豊が守護の座に着いているからである。

この「明応の争乱」は備後が戦乱の時代に突入したことを示す事件として特記されるべきものであるが、この争乱は三吉氏一族の御調占拠にも大いに関係があると思われる。

他の史料によると、この時三吉氏は三谷郡の和智、江田の両氏と共に政豊方として戦っている。そして、それに対抗して俊豊方として活躍したのが庄原の甲山城主山内氏であったのだ。その山内家に伝わる古文書の一つに次の文書がある。

『山内首藤家文書』五五四号

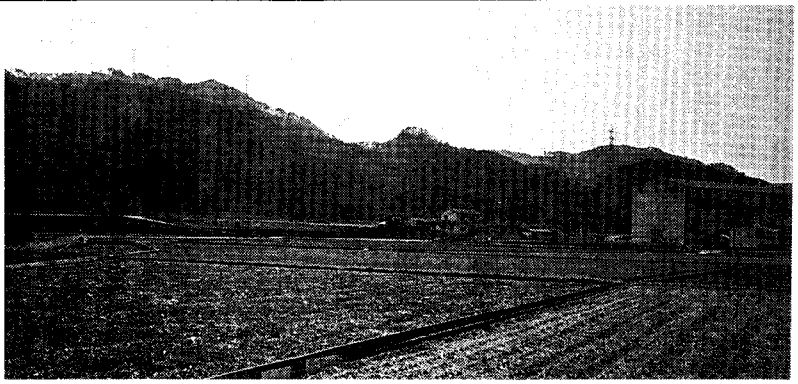
山名俊豊判物

但馬国城崎郡篠岡庄之内篠岡長間守跡
備後御調郡之内三吉敷名跡七拾貫文
三吉森光跡弐拾貫文、三吉池上跡弐拾
五貫文等事、就於今度但州抽自余
之輩堪忍忠節、為恩賞之地、所充
行也、早守先例、可致其沙汰之状
如件
（山名俊豊）
明応二年五月十六日　（花押）
（通久）
山内刑部四郎殿

これは、山内氏一族通久の忠節に対して、その勲功の賞として俊豊が与えた知行充行状であるが、その文中に「御調郡之内三吉敷名跡七拾貫文、三吉森光跡弐拾貫文、三吉池上跡弐拾五貫文」の記載があるのに注目していただきたい。つまり、これは三吉一族が当時この地に所領を持っていたこと、そして、政豊方として俊豊に敵対していたことを示すものである。もちろん、時は戦国時代である。こんな一片の紙切れで所領を獲得できる筈はない。自分の力でそれを現実のものにしなければならないのである。事実、山内氏がこの後御調町内に割拠した形跡はない。

これらの点から推定すれば、明応二年の政変に際して政豊方に味方した三吉氏一族はその恩賞として御調町内に所領を与えられた。それに対抗して俊豊方も山内氏一族に御調町内の三吉氏所領を与えてこれに対抗させた。そして、明応八年に至る六年間にわたる戦いの間に三吉一族が山内一族を圧倒して御調の地に山城を築き、確固たる自己の所領とし

たのであろう。このように、小さな山城、小領主の歴史もそんなに簡単なものではない。この場合も中央の将軍職をめぐる争いが、地方の守護大名家に波及し、その結果在地豪族達は血を流して争い、そしてこの御調の地にも小さな山城が三ケ所程度築かれたのである。



森光（守光）氏の拠った牛の皮城跡（御調町大町）

西の小京都を尋ねて

岡本　貞子

去る十月十九、二十日の二日間、木犀の香り仄かな山陽路を西へ山口へと探訪した。

その昔、推古から天文まで約九百五十年間、山口を中心として栄えた大内氏と今から四百年前、安芸の国に台頭した毛利氏の古城を尋ねる旅である。

総勢約五十名、七月に申し込み当日を迎えたのである。見学地は、建咲院、勝栄寺、国府跡、毛利邸、国分寺、防府天満宮、湯田温泉一泊、朝田墳墓群、八坂神社、龍福寺、瑠璃光寺、常栄寺、古熊神社等。

出発の朝は例の如く好天、車窓に移り行く錦秋の山野、点在する赤い柿の実が晩秋の太陽の中で輝いている。

まづ建咲院では、元就の遺髪の由来を聞く、勝栄寺では広い庭園を巡り、鯉の遊泳する池の傍らで昼食を摂る。少し寒かった。続いて国府跡八町もある方形の府域は、海上交通の利便を得て当時、どんなにか繁栄したことであろう。国分寺では、金堂に安置されている素晴らしい沢山の霊仏の前で唯唯、圧倒されて息を呑んだ。上代から国府や、大内氏、毛利氏等、権力者の手厚い保護があったからこそ遺ったのであろう。これらは重文であり、旧境内は史跡に指定されている。毛利邸も重厚な居館であった。

一泊する湯田の郷は、静かな町である。市街には至るところに有名俳師の句碑があり楽しむ。古くから培われた文芸の素地が、西の京と云われる雅な風流を伝えているのであろう。ふと見ると湯けむり棚引く街角に、孤が手拭いを頭に温泉に浸っている小さな像があった。湯船に手を入れると、熱い湯が滾々と湧き出ている。孤の表情と同じように、私の眼も糸のように細くなって、心豊かになる。街にこだまする下駄の音も、むかし懐かしい郷愁を呼び湯の町情緒が身に迫る。

大内氏居館跡地には、その区割りに杭が打ってあり、広大な地域に立って計り知れない古代のロマンを空想する。

約千年に近い治世は三十一代を継ぎ、西中国は云うに及ばず、北九州さえも席巻して海外貿易に雄飛した大内氏、その富と栄華はいかばかりであっただろう。だがその主流は滅亡し、遺物は跡形もない。今は大きな文化的遺産、西の京という形見のみが残っているという史実に、深い感動を覚える。

鄙びて雅な町並みに立って、これこそ人間が住むにふさわしい、ふるさとのようなところではないかと思った。

探訪の度に、知らなかった先人を身近に考える機会を得て、感銘と共に深く感謝している。

会長並びに、幹事の皆様、ありがとうございました。

歴民研からのご案内

加茂町の石造物分布調査

歴民研では「歴民研もフィールドへ出よう」を合い言葉に福山市加茂町周辺の石造物の分布調査を行っております。石造物に興味のある方、民族学に興味のある方、ぜひご参加下さい。

《実施要領》

日時
十二月十五日（日）午前十時

集合場所
加茂神社境内（福山市加茂町）

持参物
筆記用具等

尾道の女性

後藤　匡史

一、朝のホームにたたずむ貴女は
電車を待ってる一刻を
本を持つ片手に目を伏せて
肩にたらしたバッグが重い
白い吐息が頬打つ風に
尾道の女性

二、二人の挨拶駅裏あたり
笑顔さわやか瞳が笑う
会社務めのいつもの道を
貴女はあの道僕との道を
行ってらっしゃい
手をふりあえば
白いうなじの
尾道の女性

三、貴女の街並み千光寺山
昇れば見える尾道水道
青い海原どこまで続く
海の向うは四国の山よ
瀬戸の島々白波映えて
明日を夢見る
尾道の女性

箸と櫛にこだわって

門田　幸男

古事記神話が出雲神話に入った。そのきっかけとなるのが箸が流れてきたことですが、現在のような二本箸が二本そろって流れて来ることはないはずで、別々に流れてくると単なる棒か小枝であって箸だとは気づかない。一見して箸だと分かるためには、古代のピンセット形の曲げ箸であろうと推定されている。次の段では櫛名田姫を湯津爪櫛に変身させて髪に刺したとある。ここで櫛も現在の形の櫛ではなく、古代の櫛は縦長で古代の箸と外形が相似なことが遺物によって証明されている。ここで歴史や神話に興味を持つ人なら思い出すのが三輪の神の姿が見たいと言った時、神は櫛笥の中に入っていたから、三輪にかぎらず山の神はオロケ（峰ろ霊）であり、櫛はその代名詞である事が知れる。櫛名田姫の先祖は大山津見神であり、父母は足無っ霊・手無っ霊（蛇の別の表現）であって終始一貫「山の神は蛇」の思想で記述されている。ヤマタのオロチの背に桧・杉が生えているという表現は、山の神　即ち峰ろ霊の原則に立てば難なく理解することができる。足名椎・手名椎の解釈に櫛名田姫の足をなでていつくしむ――という説（倉野憲司）であるとか、足名＝浅稲（晩稲）の霊、手名＝速稲（早稲）の霊だと言う説（西宮一民）など稲田姫の名前からの連想でしょうが、箸と櫛、峰ろ霊などと一貫性が無いのが難点である。古事記にかぎらず小説でも作者や編者の持つ思想性に立脚して記述されているから、一見不思議に見えても作者の思想の原則に立って読めば良く理解する事ができる。一例として、平田氏が提出された疑問でスサノオの乱暴な行為の最後に馬を逆はぎ（殺す）にして棟から桟屋に投げ落とすという行為をしますが、突然馬がでるのはなぜなのかという事です。馬と言えば巨大な男根がすぐに頭に浮かびます。又、家屋は人がこもる場所でありますから母胎を意味します。この事から姦淫の暗喩だろうとの（吉野裕子）説もありますが、私は、馬は午だろうと考えている。前に申したようにアマテラスは易卦で中女の　に当たりますから火の象を持ちますが、午は時間では真ひる方位は南（後天易）で、季節では夏の盛りである。火は炎上するのが特性ですが、馬を逆はぎにして屋根から落とすと言うことは、アマテラスを殺すことの別の表現に外なりません。その上に梭で火処を傷つけたのが致命傷となってアマテラスは死んだのである。スサノオの易卦は中男の坎でアマテラスとは逆の北（後易天）であり、水気に屈しますから火に水をぶっかけたのと同じことで、消えた火を戻すために神々がした事はアメノウズメの火処の露出であり、神々がそれを視て大笑いして（二つとも火気に屈す）火（アマテラス）の再生を期したのである。このように作者の依拠する原則（陰陽思想）を用いれば謎に満ちたように見える神話や伝説が苦もなく解けることを吉野裕子先生は実証して見せていると思う。

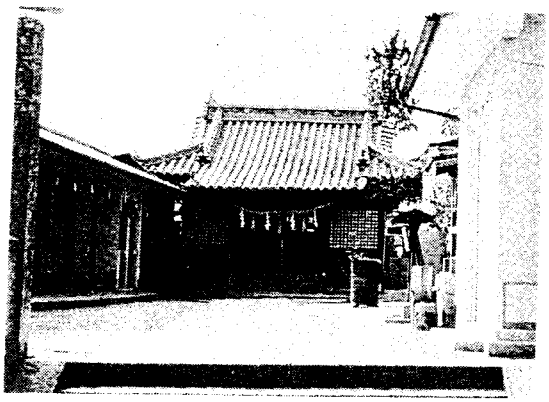
☆会報七五号の原稿募集

『備陽史探訪』七五号（一月二十日発行予定）の原稿を募集します。内容は自由ですのでふるって応募して下さい。字数は、「氏名とタイトル」別で本文「タテ十六字×一二〇行」以内でお願いします。

なるべく多数の方の原稿を掲載したいと思いますので、原稿は一人一本、字数厳守でお願いします。

尾道ベッチャー祭り
迫る鬼！号泣・歓声

柿本　光明



菊花の薫る十一月、鬼が子どもを追い回して厄を払う吉備津彦（一宮）神社＝尾道市東土町宝土寺境内＝の奇祭「ベッチャー」祭りが今年も三日に行われた。

「ベッチャー」と称するのは、神輿渡御のとき、その先祓い役として獅子頭が、天狗（猿田彦）の面に鳥兜をつけたショーキ、鼻の低い武悪面のベタ、白い磐若面のソバを従えて行列するからであり、「ベッチャー」は、そのベタ、ソバ、ショーキーが訛って祭名になったものといわれている。

『一宮社由来』によれば、文化四（一八〇七）年、尾道浦に悪疫が流行したので、時の町奉行南部藤右衛門が管内の各神社に病魔退散を祈願したとき、吉備津彦神社でも祠官平田志摩守忠安が祭事をおこない、満願成就の日御輿奉じて病家を見舞ったが、その先祓いとして獅子頭をはじめ、異様装束の三人（ショーキー　ベタ、ソバ）が先導をもとめたのが始まりと伝えられている。

また『松木家文書』によると、文化年間（一八〇四ー一八一八）、尾道の豪商松木伝兵衛が、祭りを盛り上げて、祭神の吉備津彦命への敬神の念を厚くするとともに、町の印象を強いものにしようと、諸国の祭りを参考にして、「ベッチャー」を考え出し、それを一宮社に寄進したのが始まりとも伝えられている。

この吉備津彦神社（通称）一宮さんの由来は、備中の吉備津神社の什器が当地尾道浦に故なくして来り、信者がこれを備中の同社に奉還したが再びこの地に帰って来たので、社殿を造営して奉祀したと伝えられている。その後次第に信者が増し、境内が狭かったので宝土寺境内に遷座したと古老の伝承もある。明治四年十四日町の良神社に御神体を奉還し土堂町山下友太郎所有の旧社地の寄附があり本殿改築復座した。なお小早川隆景が祈願のため日供料を別当に寄附した文書が宝土寺に伝わっている。

「ササラ竹」で子供たちをたたくベッチャー祭りの鬼「ショウキ」（尾道市長江2丁目）

祭りの当日は、神社周辺は朝早くから子供たちが集まって騒然となる。午前八時、氏子から選ばれたショーキ、ベタ、ソバ役の若者たちが、それぞれに面や衣装を着け、太鼓と鉦のはやしに乗り、獅子舞と御輿を引き連れて神社を出発すると、ショーキーはササラ竹を手にし、ベタとソバは紅白の紙で飾られた祝い棒を持って、旧市街地の路地から路地へと子供たちを追いかけ回し、手当り次第に突いたり叩いたりする。子供たちは口々に、「ショーキーベッチャー」「ショーキーベタ」と大声で囃したてながら逃げ回る。そして、祭りの雰囲気を盛り上げるかのように速いテンポの笛、チャンギリ（鉦）締太鼓の音が、子供たちの叫び声とともに町全体を異様な興奮の坩堝へとかきたてる。

祝い棒は〝神の宿る棒〟であり、これで突かれたり叩かれると、一年中病気にならない、風邪をひかないといわれ、またササラ竹で叩かれると、丈夫になる、良い子に育つとの言い伝えから、親は、子供をショーキーやベタ、ソバに近づけようとするが、子供は怖がって逃げ回り、幼児は恐れおののいて、親の胸にしがみついて泣き叫ぶ。本来、人を突いたり叩いたりするのは許されることではないが、ここでは演じる者と見る者とがまさに一体となり、神のなせる業として許し、認め合うことによって厄を払い、子供の健やかな成長を願うのである。今年も、秋晴れのよい一日であった。

二つの磐座

平田　恵彦

どうも私は「磐座」や「磐境」という言葉には過剰に反応するところがあるようだ。

最近もこんなことがあった。

会員の共同執筆で「福山リビング」に連載している「ふるさとの史跡探訪」では、私は原始・古代編を担当させてもらっている。その「天津磐境遺跡」の原稿を書いた際、本文中の磐境、磐座の文字が、タイトルも含めて実際の紙面ではすべて「盤境」「盤座」に書き替えられていたのである。これを見た瞬間、正直私は頭に血が上った。しかし次の瞬間、しまった、とも思った。どうして一言いっておかなかったのかと後悔した。

ご存じない方もいらっしゃると思うが、現代表記では「磐」は「盤」に書き替える約束になっているのである。例えば「落磐」は「落盤」に、「磐石」は「盤石」にというように。おそらく編集者は、素直にこの原則にしたがって書き替えられたのだと思う。

けれども私には、絶対に「石」でなければならぬ、「皿」では意味がない、という強い思い入れがあり、その時はかなり悶々としたのである。「落盤」にはまったく抵抗がなくても「盤座」には腹が立つ。私のこうした思いはいったいどこからくるのだろうか。

この十一月三日、四日の両日、出雲に一人旅に出た。何人かの会員を誘ったのだが、残念ながらつきあってくれる人はいなかった。最大の目的は、もちろん銅鐸三八個を出土したあの加茂岩倉遺跡を見学するためである。実は、現地説明会のあった十月十九日は備探の会の一泊旅行の日で、よほどすっぽかしてやろうかと思ったが、そうもいかず、この日になったのである。

遺跡は加茂町を南北に貫く国道54号線のバス停「岩倉」から西に2Km ほど進み、さらに細い谷筋を南に数百メートル入ったところにある。日祭日はクルマの進入が許可されていないので、国道沿いにある臨時駐車場から30分ほど歩かねばならない。雨上がりの早朝のんびり歩きながら、岩倉の谷は駅屋町服部や福山市加茂町の芦原周辺にどことなく似ているように思った。

遺跡は切り通しの急な斜面の中腹にあって、階段はつけられているが、発掘調査が終わっていないので登って見学はできない。道をはさんだ反対の斜面に足場が組んであり、そこから望遠鏡で見るだけであった。視界に入る銅鐸は　半分以上土に埋もれた状態で、しかも望遠鏡の性能が悪く、小さくしか見えない。むしろ新聞の写真のほうが分かりやすいくらいで、その意味ではがっかりした。

しかし、銅鐸が出土した周辺の状況を体感できたのは大きな収穫だった。本当にこんなところにと思われるほど、人気のない谷間の奥まった場所なのである。静岡県在住のアマチュア銅鐸研究家の大野勝美さんが、平成六年に自費出版された本のタイトルが『銅鐸の谷』（福山市民図書館にある。著者の銅鐸にかける情熱がひしひしと伝わってくる好著。著者寄贈本）だった。やっぱりそうなんだなと思った。

岩倉の地名については、古代祭祀の磐座からきていると考えている学者は多く、銅鐸近畿製造説の春成秀爾さん（国立歴史民俗博物館教授）がその代表で、私もそうだと思う。

地名についてはおもしろい話がある。賀茂神社（福山市加茂町）宮司の石井良枝さんから聞いた話である。

今回の銅鐸が発見されるよりずいぶん前に、石井さんのところに一人の男が訪ねてきて、このあたりで銅鐸が発見されたとか、銅鐸のいい伝えはないかと尋ねていったというのである。その男によれば、加茂という地名は銅鐸に縁が深いというのだが、はからずも今回の発見で証明されたことになる。これはまったくの想像だが、このある男はひょっとして大野勝美さんではなかったのだろうか。もしそうならば『銅鐸の谷』が福山市民図書館に寄贈されている説明がつく。

今回の旅行では月山富田城など、ほかにも多くの場所を探訪したが、最も印象に残っているのは、何といっても立岩神社である。

立岩神社は平田市坂浦町立石の集落にある。集落といっても四軒しかなく、いずれも曽田姓である。神社は道から外れたところにあるらしくどこにあるか分からない。私はずうずうしくも一軒の曽田さんの家に飛び込み、案内をお願いした。道路から斜面を下り、木々が繁茂する中を抜け、竹藪を通り過ぎたところに神社はあった。私は言葉を失った。

二つの巨石が屹立するその姿はまさに神そのものであった。

こうした神祀りの場を目のあたりすると、やはり「盤座」ではなく、「磐座」でなければならぬとつくづく思うのである。

宮盛忠について

木下　和司

宮盛忠という人物が、歴史上にその足跡を現わすのは文明六年～七年（一四七四～五）のわずか二年間にすぎません。私がなぜこの人物に興味をもったかというと、『小早川家文書』にある三通の古文書に関係してです。この三通とも芸備での応仁の乱の終息、即ち沼田小早川氏の居城・高山城包囲の開陣に関係しています。高山城開陣の主役は、五人の人物です。東軍は安芸の小早川掃部助元平と備中の庄伊豆守元資です。西軍三人のうち、二人が宮姓を持つ人物です。残る一人は備後守護代宮田教言です。宮姓の二人は「高山城開陣時證状覚書写」では「両宮」と呼ばれていて、一人は宮若狭守政信であり、もう一人が本稿の主題となる宮五三郎盛忠です。

高山城開陣に関係したのは、いずれも錚々たる人物です。東軍の小早川元平は安芸の有力国人で奉公衆でもある沼田小早川氏惣領であり、庄元資は守護代を務める備中の有力国人です。また、宮田教言は、西軍の主将・山名宗全の腹心です。

室町時代、宮氏には有力な二つの家系、惣領家と考えられる下野守家と有力な庶子家・上野介家がありましたが、宮若狭守の実名「政信」は将軍・義政の偏諱「政」と上野介家の通字「信」の組合せですから、この人物は上野介家の惣領と考えられます。これに対して宮五三郎盛忠とは何者なのでしょうか。先に述べたように、この二人は「両宮」と呼ばれていましたから単純に考えれば、下野守家を代表しているように思われます。だが事態はそうは単純ではないようです。もし、若狭守政信とバランスが取れる人物をここに並べるとすれば、下野守もしくは下野守家に縁りの深い修理亮（注一）、駿河守（注二）、中務丞（注三）等の官途を持つ人物が登場するべきだと思います。しかし、現実にここに登場しているのは官途を持たず、仮名「五三郎」を名乗る人物なのです。

高山城開陣に際して、下野守家の有力者が登場しない理由は、備後の郷土史料『渡辺家先祖覚書』によって想像ができます。これによれば、

「取分宮下野守殿同彼一門かしは村ニ引籠被居候　備前国松田方庄伊豆守方猛勢ニて御合力致申候　…中略…　然間へ宮一類かしは村に於て下野守殿を始とし悉腹を御切備後国無残所従御下知候　…後略…」とあって、

文明三年四月、備後に下向した東軍の備後守護山名是豊及びそれに味方する備前・備中勢に攻めたてられて宮下野守家の有力者たちは、文明六年頃までに柏村の居城で切腹したと思われます。このために、文明七年の高山城開陣に下野守家の有力者は登場できないと想像されます。

それでは宮盛忠とは何ものなのでしょうか。下野守家に関わりのある人物なのでしょうか。『福山市史』・『三原市史』では「両宮」、即ち宮若狭守・五三郎を共に宮家の有力な庶家としています。田口会長は、「久代宮氏の出自について」（『備陽史探訪第六八号』）の中で、『平賀家文書』年欠三月二三日付陶興房書状を根拠に「両宮」を久代宮氏の先代にあたるとして、盛忠も政信と同じく上野介家の一門と考えておられます。即ち上野介家第二代氏信の嫡子と考えられる満信（上野介家）、とその弟氏兼の家系（彦次郎家）を指すとされています。先に引用したように、惣領下野守家が山名是豊の攻撃で大きなダメージを受け、芸備の応仁・文明の乱終息に十分な役割を果たすことができず、それを補うために上野介家の庶子家である氏兼の家系「彦次郎家」が表舞台に登場し、「両宮」と呼ばれたと言うことになるわけです。

「両宮」と言う名が歴史上に現れるのは、応仁年間から明応年間に限られ、備中・備後・安芸の各地で一緒に行動しています（注四）。元々下野守家と上野介家は仲の良い家系ではないようで、南北朝初期の争乱に際して、下野守家は南朝方に、上野介家は北朝方に属して戦っています。また、『蔭涼軒日録』長享三年（一四八九）八月十二日の条によると、細川政元邸での宴席の席次を巡って、下野守政盛と若狭守（上野介家）宗兼が惣領庶子の論争を繰り広げています。こう考えてくると、芸備地方で同一歩調の軍事行動を取っている家系とは考えにくく、「両宮」を下野守家と上野介家のペアに比定することは難しいようにも思われます。

では本稿の主題である「宮盛忠」とは、どのような人物なのでしょうか。はっきり言えば現状の私の知識では、明確に結論付ける事が出来ません。この稿を書こうと考えた時には、単純に下野守家、若くは、それに近いと思われる庶子家、例えば、三河守家、遠江守家（注五）とかを考えていたのですが、田口会長とお

話をしている時に、そう単純ではない事に気付かされたのです。一つは、文書様式上の問題があります。政信・盛忠の名が、具体的に現れる書状は『小早川家文書』の「小早川元平書状」と「宮政信盛忠連署状写」です。前者は、元平が宮田教言、宮政信・盛忠の三人に充てた書状で宛所の順序は、教言・若狭守・五三郎となっています。後者は、政信と盛忠が元平に充てた書状で、差出人の順序は盛忠・政信となっています。古文書の文書様式では、宛所は本文に近い方が上位者であり、差出人は本文から遠い方が上位者を示します。従って、政信が盛忠の上位者と言う事を示している事になります。

確かに政信は若狭守と言う官途を持っており、官途を持たない盛忠より上位者と考えられますが、官途の有無は、おそらく年齢によるものと思われます。しかし、ここで盛忠が下野守家を代表していると仮定すると、惣領家を代表している訳ですから、官途に関係なく上位者の位置にくるべきだと考えられます。これは先に述べた古文書の文書様式とは矛盾しており、盛忠の庶子家説を支持しているように思われます。

もう一つ宮盛忠庶子家説を支持する材料としては、『毛利家文書』の「毛利豊元譲状」があります。この文書は、文明七年（一四七五）十一月二十四日付けで、毛利豊元がその子千代寿丸に対して新規に獲得した所領の譲り渡しを示したもので、領有権の保証者として、山内泰通、宮田教言と並んで宮教元の名前が見えます。教元は下野守家六代目惣領と考えられ、『渡辺家先祖覚書』で切腹したとされている下野守にあたると思われる人物です。『渡辺家先祖覚書』は、天文三年（一五三四）に書かれており、柏村の合戦から約六十年が経過しているため、下野守家が大打撃を受けたことが下野守の切腹として伝わったのかも知れません。文明七年の時点で下野守教元が存命していたとすれば、下野守家を代表すべき人物と言うことになります。したがって、もし「両宮」が下野守・上野介、両家を指しているとするならば、上野介家の政信に対して下野守家は教元が登場する必要があると思います。しかし、現実に政信の相方は盛忠であり、このことは盛忠が下野守家を代表していないことを支持しているように思われます。

一方、盛忠が下野守家に属するのではないかと考えられる根拠としては、その実名にある「盛」が、下野守家の通字であることが挙げられます。下野守家惣領は、満盛・元盛・政盛のように将軍家及びその重臣の偏諱を受けることが多かったようで「盛」の字を実名の下に持っています。これに対して下野守家の庶子家と思われる三河守家・遠江守家では下野守家初代盛重の系統を引く名乗りを用いています。三河守家では盛廣、遠江守家では盛長・盛秀と言う実名が使われており、盛忠もこの系列に属する名前と考えられます。このことは盛忠が下野守家に属することを示しているように思われます。

宮盛忠がどのような人物であるかを高山城開陣に関係した古文書から考えてみたのですが、どうも明確な答えを得られそうにありません。そこで他に盛忠に関係する文書がないかどうか探してみると、『山内首藤家文書』の中に一編だけ見つける事ができました。それは、文明六年十一月十八日付けの「宮盛忠契約状」と呼ばれている文書です。この文書は、小条孫右衛門尉跡の田畠を年貢十貫文と諸役を納める事を条件に山内首藤家に関係する誰かにゆずり渡した事を示すものです。この文書の宛所は欠落していて不明です。

文明六年段階で盛忠は、所領の成敗権を持っていたと考えられますから、いずれかの宮家の惣領と考えられます。もし「宮盛忠契約状」の宛所が山内新左衛門尉豊成であるとすれば、それと釣り合う家は宮下野守家、若しくは上野介家しかなく、従って先に述べた名乗りの問題と合わせて考えると、盛忠は下野守家を代表していると考える方が合理的だと思われます。しかし、あくまで宛所が山内豊成の場合であり、現状では明確に断定することはできません。

以上、本稿の主題に据えた「宮盛忠」について色々考えてみたのですが、やはり盛忠がどんな人物なのかを明確にはできていません。でも備後の応仁年間から明応年間までの歴史を調べてみて一つ朧げながら分かったことがあります。それは、この時期の備後の歴史が、二つのベクトルを軸にして動いているのではないかと言うことです。一つの軸は、備北から備南へ勢力を延ばそうとする山内首藤氏の意思であり、もう一つの軸は備南から備北へ延びようとする宮氏の意思であると思われます。この二つの軸と大内（毛利）、尼子の二大勢力の外圧が複雑に絡みあって、備後の歴史が動いていたように私には思えます。

ここまで述べてきたことから、応仁～明応年間の備後の歴史を考える時、「両宮」即ち宮盛忠の正体が一

つのポイントとなると思われます。今後もう少し精進して、この時期の備後の動乱を理解できるようになりたいと思っています。

（注一）『康富記』宝徳二年七月五日の条に、宮下野修理亮教元とみえる。

（注二）『在盛卿記』長禄二年十二月五日の条に、宮駿河守教元とみえる。

（注三）『小早川文書』2・一三二号「伊勢貞親奉書写」（寛正二、三年十月九日）に両使、小早川備後守・宮中務丞とみえ、「東山殿時代大名外様附」に宮下野守と同じく五番に宮中務丞とみえる。

（注四）

※『萩藩閥閲録』巻一二四―一「平賀九郎兵衛家文書」五〇

※『萩藩閥閲録』巻一六「志道太郎右衛門家文書」六〇

（注五）『石清水放生会記』永享十年八月十五日の条に、宮三河守盛廣、宮五郎左衛門尉盛長と見える。また、『長享元年九月十二日常徳院殿様江州御動座当時在陣衆着到』に宮五郎左衛門尉盛秀とみえ、『蔭涼軒日録』延徳二年一月廿三日の条に、宮遠江守盛秀とみえる。

矢筈城登山記

遵行使節　沙弥

去る十一月十七日に行われました立石先生追悼『矢筈城登山会』の模様を戦国講談風に書いてみたいと思います。しばらくの間、お付き合いをお願い致します。

時に、平成八年十一月十七日午前八時、福山駅北口に勢揃いした「備陽史探訪軍団」、田口備後守殿率いる精鋭四十騎。軍師と仰ぐ出内安芸入道殿を先導にして、御敵・草刈備前守が立て籠る矢筈城へと山陽道をいざ出陣す。秋空は、暗雲深く垂れ込め、我が軍団の苦戦を予測しているようであった。パンパン。さてこの時、備後守殿が安芸入道殿に尋ねて言う、「入道殿、雨具の用意や如何」。これに答えて安芸入道殿曰く「ござんなれ、此の通り準備万端遺漏なし」と持参のカッパを指し示す。それを聞いた備後守どの「これにて天候に憂いなし」という。

山陽道から備前・美作路をひた駆けること約二時間と半、眼前に開ける草刈氏の本拠地・加茂郷が。情報収集怠りない備陽史軍団、加茂町公民館へ立ち寄り、矢筈城の情報を集めにかかる頼もしき強者達。パンパン。地元矢筈城保存会の方々の親切なる先導を受け、いざ、向かわん矢筈城。

それから十数分、とうとう着いた矢筈城搦め手、千磐神社。ここで奮い起つ面々を押さえて、田口備後守殿より「矢筈城」攻略の手はずを聞く。さて、備陽史軍団の面々、眼前にそびえ立つ険阻な矢筈山をみて怖じけるどころか、勇んで攻略に出発す。先陣は、いつもの如く出内安芸入道殿・中村美作入道殿、本陣に田口備後守殿。拙者は先陣を仰せつかりたく勇んでみたが、備後守殿より平田周防介殿と共に殿軍を仰せつかる。ああ、無念。

攻略開始後二十分、急峻な山道続き、日頃の運動不足のかいあってか拙者もはやバテぎみ。これではならじと気力を奮いたたせて先へ進む。すこし遅れ気味の女将達を気遣い平田周防介殿は別働隊を率いるため分かれ行く。強行軍での疲労を気にして備後守殿の激励が飛ぶ。「すぐに頂上が見えるぞ」。その声に励まされて我ら精鋭は先へ、先へと進んでいく。

攻略開始後三十分、田口備後守殿の「小休止」の声が響く。やれやれと立ち休みにはいる備陽史軍団の面々。佐藤秀子御前より伽羅目留をいただく。疲れた体に甘いものが沁みとおり疲れを癒してくれる。感謝感謝。中村美作入道殿の「進撃」の声に答えて動き出す我らが軍団。

攻略開始後四十分、標識に第一の攻略目標「成興寺丸」まで五百メートルと見える。もう五百メートルかと元気づく。勇んで先を駆けて行く備陽史軍団の精鋭達。パンパン。それから五分後、緩やかだった山道が再び急峻になり、またも我らを疲労が襲う。その時、眼前の標識に「成興寺丸」まで八百メートルと書かれている。一気に疲労が倍増して襲い掛かってくる。「おのれ、先の五百メートルは敵の謀略か。」山道は増々急峻になり果てしない続くように思えてくる。「あぁもうだめだ。」と思えて来たとき、主将田口備後守殿の「頂上が見えたぞ。もう少しだぞ」の声が聞こえてくる。もうひと頑張りだと力を振り絞って前に進む備陽史軍団の精鋭。しかし、行けども行けども頂上は見えず、疲労のみが蓄積されていく。パンパン。

攻略開始後一時間と十分、もうだめだ、引き返えそうと考えた時、目の前を行く人に気がつく。その人は本日の最年長者・池田伊豫入道殿ではないか。七十九才の伊豫入道殿が

頑張っておられるのに、年齢半分以下の拙者が撤退とは情けなゃ。パンパン。と伊豫入道殿の後に続いてひたすら登っていく。

攻略開始後一時間と二十分、再び備後守殿の声が響く。「本当に頂上が見えたぞ。もう少しだぞ」と。半信半疑ながら気力を振り絞って前へと進み。進むこと十分、最後の厳しい勾配を越えると、そこには「成興寺丸」の削平地があった。我ら備陽史軍団の勢いに恐れをなしたか、パンパン、敵兵の姿は人っ子一人見えず、「成興寺丸」の攻略を完了す。それから十分後、平田周防介殿率いる別動隊も到着す。一人の脱落者もなく「成興寺丸」への登頂に成功。この峻険な山城を脱落者なしに攻略するとはさすがは、団結固き「備陽史探訪軍団」と感心す。パンパン。

精鋭各々が、困難を克服した満足感に浸りながら、自然のなかで食べる昼食の旨さはまた格別。恒例の御神酒も廻され、年やかな歓談が続く。休憩すること一時間、再び中村美作入道殿の号令で「本城」へ向かって進撃開始。

本城までは急峻な山道もあるが、成興寺丸までのような厳しさはなく比較的単調に登っていくことができた。約三十分後、何の抵抗もなく本丸の占領を完了す。草刈勢は、我らの勢いに恐れをなして逃げ散った模様。備陽史軍団・精鋭四十騎勢揃いして、矢筈山攻城記念の写真撮影を行う。パンパン。

全員無事で意気揚々と下山にかかる。先頭はいつもと同じく出内・中村両入道殿。拙者は下山時も不満ながら殿軍を仰せつかる。帰還は大手側を下るが、搦め手側より勾配厳しく両入道殿の戦略眼に感服する。しかし、逃げ散ったはずの草刈勢の仕掛けた罠か、下山時の山道を滑り横転するもの多数。かく言う拙者も不覚にも横滑りに転倒し、当会の宮宗姫とその朋友の姫君に爆笑される。武士の面目一欠片も無し。誠にもって不覚の極み。

下山時に、若干のハップニングはあったものの、パンパン。総員無事下山。福山に向かってひた駆ける総勢四十騎。美作入道殿は、この攻城戦を大いに危惧されていたためか、無事登頂成功に安堵され、珍しくかなりの酩酊状態。本当にご苦労に存じる。パンパン。

午後七時半ころ全騎福山駅北口到着。登山と古城跡の探訪を兼ねた有意義な例会は、心地よい疲労の中に終了した。

事務局だより

今年もおしつまり、日増しに寒さが厳しくなる季節になって参りました。会員の皆様には如何お過ごしでしょうか。

さて、一年の締めくくりの季節になりました。当会でも年末恒例の特別郷土史講座、忘年会等の行事を予定しております。皆様、どうぞ万障繰り合わせのうえご参加をお願い致します。尚、日程等については本稿の行事案内をご覧下さい。

寒さ厳しい季節になります。お風邪など召されないようお体にご注意下さい。

役員一同

事務局日誌

。十一月二日（土）古墳講座
「掛迫古墳測量調査速報」
参加・二十四名
。十一月九日（土）
「古事記を読む会」参加・十三名
終了後会報七三号発送作業
。十一月十日（日）十一月例会
「吉備の弥生墳丘墓」
参加・五十三名
。十一月十六日（土）
▼「石造物分布調査説明会」
参加・二十名
終了後、「矢筈城登山会」資料作成作業
▼「備後古城記を読む」
参加・十三名
。十一月十七日（日）
立石先生追悼「矢筈城登山会」
参加四十名
。十一月二十二、三日（金、土）
城郭談話会・中世城郭研究会一行
新高山城跡踏査、当会より会長・末森・出内・平田氏参加
。十一月三十日（土）
第十一回郷土史講座
「長和庄と長井氏について」
講師・小林定一氏
参加・二十五名
※特に断りのない場合、会場は福山市中央公民館（花園町）

平成九年度 会費納入のお願い

振込用紙を同封しますので新年度も会員を継続される方は会費を納入して下さい。

年会費は、
個人会員　三〇〇〇円
夫婦・親子会員　四〇〇〇円
です。

新入会員紹介

備陽史探訪の会へようこそ

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

今後の行事予定

十二月二十一日に延期し、また、来年一月四日の「古墳講座」は、**一月十八日**に延期します。ご注意下さい。

〔**古事記を読む**〕
・十二月二十一日（土）午後二時
・中央公民館
・資料代　百円程度

〔**備後古城記を読む**〕
・十二月二十一日（土）午後七時
・中央公民館
・資料代　百円程度

〔**古墳講座**〕
・一月十八日（土）午後二時
・中央公民館
・資料代　百円程度

事務局からのご案内

年の瀬の足音が、一歩一歩近づいて来るのが聞こえる季節になり、当会でも恒例の特別郷土史講座と忘年会を開催致します。

〔**特別郷土史講座**〕
〔講師〕
広島県立歴史博物館
草戸千軒町遺跡研究所所長
松村昌彦氏

※十二月十四日の「古事記を読む」は特別郷土史講座と重なるため、

〔テーマ〕
「江戸時代の和鏡について」
〔日時〕十二月十四日（土）
午後三時三十分～五時三十分
〔場所〕福山ワシントンホテル
〔会費〕無料

特別郷土史講座に続けて、恒例の忘年会を行います。

〔日時〕十二月十四日（土）
午後六時～八時
〔場所〕福山ワシントンホテル
〔会費〕七千円

※午後三時に福山駅北口より送迎のバスが出ます。
郷土史講座、忘年会のみのご参加も歓迎します。

※忘年会出欠のご連絡がまだの方は至急事務局までご連絡をお願い致します。

〔**役員会のおしらせ**〕
左記の日程で役員会を開催致します。役員の皆様には宜しくご参集をお願い致します。
〔日時〕十二月十四日（土）
午後一時三十分
〔場所〕福山ワシントンホテル
一階ガスライト
〔議題〕
平成九年度事業計画について

編集後記

二度目の会報編集を何とか無事に務めることができました。原稿をお寄せ頂いた方々に深くお礼申しあげます。

この会報は、マッキントッシュと言うパソコンで編集しているのですが、編集作業開始前にこのパソコンが壊れてどうしようと思っていたのですが、友人のものを借りることができたので助かりました。持つべきものは「友」ですねぇ。

先日、矢筈城登山会に参加して、運動不足を痛感しました。この一年間は文献史学に偏り過ぎていた反省もあり、寒い内に近辺の山城を歩いて見ようかと考えています。何か計画されている方がいらしたら声をかけて下さい。宜しくお願いします。

また、来年も機会があれば会報の編集を担当させてもらおうかと思っていますので、その時はまた宜しくお願いします。

（遵行使節　沙弥）

備陽史探訪の会事務局　〒七二〇
福山市多治米町五－十九－八
☎〇八四九（五三）六一五七